

手描きの味わいを 伝えていきます



秋山 明弘さん
(43歳・東本町一丁目)

提灯は日本の伝統文化です

古河市では、「関東の奇祭古河提灯竿もみまつり」でお馴染みの提灯ですが、最近家庭の中ではあまり見かけなくなっています。

日本の伝統を守り、文化として、伝承していこうと東本町一丁目で提灯を製造・販売している、秋山明弘さんを訪ね、提灯づくりのきっかけ、魅力等についてお聞きしました。

「幼いころから親が提灯をつくっている姿を見て育ってきましたので、自分の腕一本でつくったものを直接売ることによって努力した分、お客さまに喜んでいただける。そういう顔を見ながら仕事ができることが励みになりますね。提灯は、生活の中の灯として生まれ、江戸時代には専門の職人も出てきて、文字も入るようになってきました。文字はさまざまですが、曲面にもものを書いたり、絵柄を書いたりす

ぶんがくかん発
Vol.56

古河文学散歩

古河文学館の春のテーマ展は、「古河文学散歩」です。

「文学散歩」という言葉は、現在では一般的に使われていますが、この言葉が最初に使われたのは、詩人で編集者の野田宇太郎が昭和26年(1951)に日本読書新聞から出版した「新東京文学散歩」であるといわれています。

今は亡き偉大な文人たちが活躍した佳き時代を思い出し、記憶に刻み込む。変化の早い東京の町から文人ゆかりの建物が次々に消えていき、その場所が忘れられてしまう。今、町を歩かなければ森鷗外や夏目漱石、島崎藤村や永井荷風が見た町の風景が消えてしまう。そう思い立った野田宇太郎が自覚的に文学散歩を開始したのは、昭和25年の12月のことです。その当時の日本は、アメリカ合衆国の占領下であり、世はまさに戦後の混乱期でありました。

野田宇太郎の文学散歩は、きょくていばきん曲亭馬琴の井戸を訪ね歩くというくだりはあるものの、近代文学を中心としています。

一方、今回のテーマ展の古河文学散歩は、万葉の時

代に始まり、中世の^{いなわしろけんさい}猪苗代兼載、近世の曲亭馬琴、近現代の若杉鳥子や和田芳恵など、日本文学史全体にゆかりのある地を訪ねるところが大きな特徴です。敬慕する亡き文人ゆかりの地を訪ねる歌枕という日本古来の伝統に現代的な文学散歩を加味したものが、古河文学散歩といえるでしょう。



和田芳恵の墓 宗願寺

このコースは、文学を中心としたものですが、歴史の町古河に関する史跡や散歩の途中に立ち寄れる飲食店・土産物店などについても配慮しました。また、散歩ですから何よりも歩いて楽しい町並みを通れるようなコースを選びました。

散歩という性格上、田山花袋ゆかりの中田町や、若杉鳥子と長塚節の文学碑のある総合公園などは、残念ながら割愛しました。今回取りあげられなかった

古河文学ゆかりの地がこの外にも沢山あることは、言うまでもありません。

古河文学散歩コースの地図は、文学館に常時用意しています。地図を片手に、一日野田宇太郎や永井荷風になったつもりで、古河の文学散歩を楽しんでみてはいかがでしょうか。